

第二章 文化のなかに埋め込まれた自然——中国・上海の閩コオロギ文化——

菅 豊

一 はじめに

中国における自然観は、文化と自然、あるいは人間と自然との間を厳格に画する、ヨーロッパ的な構図から読み解けるのであろうか。文化と自然を二項対立の構図でとらえるやり方は、世界を理解するための体系化の一方法に過ぎない。当然、その方法は普遍的ではありえない。それとは位相の異なつた体系化によつて、世界を理解する人々が多数存在するはずである。このような独自の体系を有する人々を語るのに、文化と自然の対立の構図はあまりも狭隘すぎる。もし、ここで取り扱う中国文化がそのように異なつた体系をもっているとする、我々のもつ自然や文化という言葉では十分に語りえないこともありうるであらう。

中国における世界理解の体系は、「風水」という表現で置き換えられるかもしれない。ただ、人類学的文明社会研究に大きな足跡を残したモーリス・フリードマンをして、「人間と自然とを厳格に区別する伝統の中で育つた者にとつて、一度に風水の根本的な前提を把握することは困難である」(フリードマン 一九九五…

五心と吐露せしめるほど、この体系は我々日本人を含めるヨーロッパ的思想文化に浸潤された人間には、かなり理解が難しい。「風水」を「風水」の言葉で語ることは、簡単には現在の我々にはできないのであって、それを理解するためには、我々の世界体系化の枠組みへととりあえず翻訳せねばならないのである。その意味において、中国の自然観を語るときに、nature になつてしまった自然という言葉は不自由なのである。

古くより中国では、都市化にともなう自然の消失とは裏腹に、人為的な自然を都市空間へ新しく導入する文化的風土が存在した。経済的富裕層の間では、山水を模した園林文化が広まり、また、一般都市住民によつても、盆栽や飼鳥、観賞魚など小型で手軽な栽培・飼育技術を産み出すことにより、小自然をその生活に導入する文化が培われてきている。これは花鳥魚虫文化と呼ばれ、本稿で扱う闊コオロギはその文化の一つである。

コオロギは中国各地の都市住民によつて、闊コオロギという遊戯・競技に用いられてきた。そしてコオロギの獲得から個体識別、飼育、闘技など細部にわたつて精緻で多様な民俗知識が保持されてきた。そこでコオロギは、あるがままの生き物としてではなく、人の手によつて作り上げ、完成されるべき生き物として扱われている。コオロギは本来、自然界に存在する昆虫であり、高度に都市化された社会にはほとんど自己の能力だけでは生存できないが、人間に管理されることによつて都市のなかで生き続けることができる。しかし、人為的な管理は、生き続けるという段階以上の統制をコオロギに強いている。本稿では、そういった人間側からコオロギへの過剰なアクセスのうちに、中国文化の自然観の精髓を垣間見ることが目標とする。

二 都市へ流入するコオロギ

中国は今、近代化のうねりのなかにある。そのうねりにもっとも最先端で採まれているのが、江南の大都市、上海である。一四〇〇万人以上の人口を抱えるこの都市は、至るところで建設ラッシュ。古い建物は取り壊され、次々と背の高いビル群へと姿を変えている。それでも、旧上海城の一角は、いまだ解放以前の建物を数多く残している。

旧上海城は、植民地時代から中国人のテリトリーであり、かつては租界地で我がもの顔に振る舞うことのできた外国人ですら、中国人の案内なしに足を踏み入れることができなかったほど剣呑な街であった。もちろん、この街にも確実に改革開放の荒波は押し寄せている。それでも、細い路地を生活の場とする上海下町の生活は、今でもまだ息づいている。なかでも旧上海城の西端老西門の少し南から城内に入る文廟路は、かつての風情をもっとも色濃く残している場所である。

この通りの中心にある文廟では、日曜日ともなると古本市が催され、多くの人々で賑わう。露天の小吃店(簡単な食べ物屋)に混じつて、おもちゃ売りや日用雑貨を売る小売店が文廟路には犄めいている。その小売店に隠れるようにして、出所のわからぬ骨董品を売るいかかわしい売り子が、金をもつていそうな客に声をかけている。そんな猿轡な通りから、さらに奥まった路地の一角に、一九九七年末まで文廟花鳥魚虫市場があった。



写真1 文廟花鳥魚虫市場
八月にはいと、コオロギを買い求める人々で賑わっていた。

ここには、その名の通り盆栽、切り花などから金魚、鑑賞鳥まで所狭しと並べられていた。いわゆる、ペットショップ街であり、上海にはこのような市場が昆明路、江陰路、曹安路など数カ所ある。文廟花鳥魚虫市場は道幅約三メートル、奥行き約一〇メートルの小さな路地だが、夏も終わりに近づくと、コロギ商とそのコロギを買い求める人々でごった返していた。この市場は質の良いコロギが入るので有名で、鬮コロギに熱中する上海っ子は必ずといって良いほど訪れ、また、台湾や香港、マカオなどからも熱狂的な鬮コロギファンがやって来た。

解放以前まで、上海では四馬路(今の福州路)にコロギ商が集中していた。それも五〇年代に入ると大っぴらには商売できなくなり、とくに文化大革命の頃には、人民広場の片隅でひっそりと商売がなされていたらしい。今のような盛況ぶりを取り戻したのは、一九八〇年代末のことで、認可を受けたコロギ市場が開かれてからである。

花鳥魚虫文化は、都市における消費文化の一つであり、その消費を支えるために中国国土の広大な範囲から動・植物が都市へと流入している。コロギに限定しても、半径一〇〇キロメートル以上の商圏があり、生産地である農村部からコロギ行商が大都市に運搬し、売買する。この流通システムは、明らかに都市の消費文化の形成とともに産まれたものである。

コロギはこの商業都市上海では、紛れもない商品である。一九九六年八月の調査時点では、オスココロギ(鬮コロギに使われるのはオス)の安いものは一匹五元(一元は当時日本円で約一五円)程度であったが、そのようなものはせいぜい子供の遊びに使われるのがおちで、たいいてい大人は二、三〇元から一〇〇元のものを買求める。高いものになると一万元にも達するものもあり、都市住民の平均月収が一〇〇〇元程度であることからすれば、とてつもなく法外な値段である。それでも、買う人がいるというから、上海っ

子の熱狂ぶりは推して知るべしである。

コロギは、すでに五月頃から売られている。しかし、これは、強くないということでは人気がない。上海では暑い夏が終わると、コロギたちの熱き鬮いが始まる。そのため八月に入ると、中国各地から名うてのココロギたちがコロギの行商人とともにこの街へと集まってくる。コロギは、その産地が重要視され、産地ごとに産する「品種」に特徴がある。たとえば、上海近郊の嘉定や金山などの農村部で捕れる地元のコロギは「地虫」と総称され、「真青」や「鉄砂書」などという品種を多く産するという。かつては、杭州、紹興などの浙江省産や天津産のココロギが良しとされたが、今は山東省の寧津、寧陽で仕入れられたものの人気が高い。文廟花鳥魚虫市場には一九九六年八月調査時点では、半数以上は山東省産(とする)コロギであり、その他江蘇省、河北省、安徽省産などがあった。

コロギ商には、地元上海人もいないことはない。しかし最盛期には、そのほとんどが一攫千金を求めて短期的に集まってきたよそ者である。日本人の私でもちよつと聞いたらわかるような北方訛りの男たちが特に多く、すぐに見分けがつく。また、杭州からきたという人は、コロギを竹筒にいれている人が多いので、これもまた見分けがつきやすい。山東省や河北省など北から来るコロギ商は、コロギを一つひとつ白い磁器にいれ、缶詰の底で蓋をし、輪ゴムで固定するやり方をとっている。磁器は柄を欠いたコーヒークップの半端物を流用している。

コロギは、産地と新鮮さが売り物。そのため、近場で仕入れたにもかかわらず、人気のある産地の山東省産とする、いわゆる偽ブランドコロギを売る不屈きな輩もいるという。コロギ商は地べたか、あるいは台の上に持参したコロギを容器のまま所狭

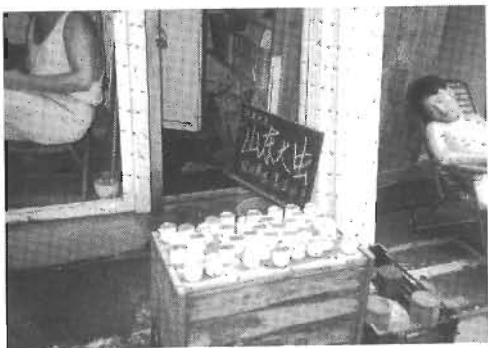


写真2 「卸値優遇 山東大虫」と書かれた黒板 宣伝文句を背に、コロギを売っている。

しと並べ、「たった今到着、寧津虫」、「卸値優遇、山東大虫」などのキャッチフレーズを書いた黒板を背にして口上をまくし立てる。足下には、コオロギを運ぶ薄汚れた旅行バッグが転がっており、なかには並べきれないコオロギや、上客目当てのどつておきのコオロギが潜ませてある。金をもっていそうな客、あるいは上物を探している客を見つけると、恭しくもったいつけてこのバッグから取り出し売りつける。

なかには、入れ墨を背中や足にいった、風体よろしからぬコオロギ商もいるが、上海っ子は気後れすることなく、丁々発止と駆け引きしている。こんなときは子供だつて負けてはいない。コオロギの入った缶の蓋を一つひとつそつと開けては、その力量を見極め、品定めする。蓋を開けるとコオロギが跳び出す場合があり、注意しなければならぬ。ただでさえ足の踏み場もないほどの人混みである。見失ったり、踏みつぶされたりすることもある。そんなときは当然賠償金ということになるから、俄然品定めは慎重になるしかない。数年前に不注意のためにコオロギを逃がしたものがいたという。ふとした隙に逃げられてしまったのだが、コオロギ商はたまつたものではない。その虫は今年の「虫王(名コオロギに与えられる称号)」の一匹だと主張し、五〇〇元賠償しろと迫つたらしい。談判のすえ、一〇〇元あまりを支払うことで落ち着いたそうであるが、こんなもめ事は夏の終わりの花鳥魚虫市場では日常茶飯事である。

コオロギを吟味する人は、手に「草」というコオロギの挑発道具をもち、これでコオロギの頭や触覚をくすぐつて、その反応をみる。牙をむき出しにして向かつてきて、さらに大きく勝ちどきを上げるものを良しとする。値段が馬鹿にならないから、買い手は真剣そのものである。たいていの上海っ子なら、コオロギに関しては一家言もっており、海千山千の行商人とはいへ、そう易々と売り払うわけにはいかない。凝っ

た人にもなると、躰の大小、頭の形や色、襟首の広さ、肉付き、足の長さや太さ、牙の形など二十数カ所ものチェックポイントがあるというから、それだけ確認するだけでも、一匹あたり一〇分や二〇分はゆうにかかつてしまう。コオロギ商も必死に売り込もうと、あの手この手を駆使する。今朝、山東からついたばかりで、新鮮で元気なコオロギを売っていることを証明するために、自分の乗ってきた汽車の切符を、台の上にディスプレイするものもある。

おおかたの鬪コオロギ愛好家は、このようなコオロギの行商人から購入し、面倒をみて戦わせるのであるが、直接、産地へ買い付けに向く熱心なものもある。山東省の寧津には、周辺農村から集荷する大きな卸売市場があつて、コオロギ商に混じつてそんなマニアが買い求めにくるといふ。また、自身で農村に赴き、実際にコオロギ捕りをするものもある。これは自家用の場合もあるが、他人に売つて商売とする場合もあり、趣味と実益をかねた鬪コオロギ愛好家も少なくない。九月など鬪コオロギの序盤戦には、浙江省や地元など南のコオロギが強いとされるが、一〇月に入り鬪コオロギの最盛期を迎えると、山東省や河北省など北のコオロギが力を出し始めるという。

三 コオロギをめぐる顕微鏡的世界

コオロギは中国の普通話(共通語)では「蟋蟀」である。しかし、上海の人々は一般に上海話で「螞蚱」また



写真4 コオロギを吟味する人々「草」を手に、慎重にコオロギの力量を見極める。



写真3 北からやって来たコオロギ商上海っ子は気後れすることなく丁々発止と駆け引きする。

は「財吉ゼンキチ」と呼び慣わしている。北から来たコオロギ商のなかには、「蝓シメツメ」という方言で呼ぶものもある。上海の花鳥虫市場では、色々なところからやって来た人々が集まっているために、「蝓シメツメ」と語られることが多い。

中国において、コオロギに関する分類学的、生物学的な分類は、厳密に完成されているとはいえない。そのため闊コオロギに使われているコオロギが、いかなる種に属するのか判断としない。「油葫芦」や「蝓シメツメ」、「花生大蝓シメツメ」などいくつかの種、あるいは亜種というレベルで把握されているようであるが、それは俗称に近く、記載上の問題がある。このあたりの事情については、中国民俗に通曉する周達生氏が的確な整理をしている(周 一九九〇:三〇九-三二〇、一九九五:七八-八〇)のでそれに譲るとして、ここでは民俗的なコオロギの分類方法についてみてみよう。この民俗的 분류は、生物学的分類が大ざっぱであるのに比べ、驚くほど微細である。

すでに述べたように、コオロギ売買の際、その質を見極めるファクターには産地や元気さなどがあるが、もつとも重要視されるのは民俗的に分類される「品種」分類と、外貌からの判断する「相法」に基づいた優劣判断である。「品種」という言葉は家畜でいう「品種(breed)」のように、一つの種のうち形質により他のものと区画され、それが遺伝的に固定された集団を指し示すものではない。それゆえ「品種」とは呼ぶのは本来不適當であるが、コオロギを売買するときに、売り手や買い手の間で頻繁に「品種」という言葉で語られるため、とりあえずこの語を用いることとする。闊コオロギに詳しい上海蝓シメツメ研究会理事長の辺文華氏へのインタビューと、同氏の著書から、その分類と優劣判断をみてみよう。

辺氏は、コオロギをまず大きく「一般のコオロギ」と、「一般でないコオロギ」との二つに分けて把握している(とくにカテゴリーの名称はない)。「一般のコオロギ」とは、闊コオロギを行う人々が、経験的に見慣れた身体的な特徴(躰の大きさ、構造、色など)を有するもので、「一般でないコオロギ」はそれから逸脱するものを範疇化したものである。両者の境界は、経験的に導き出されているようで門外漢の私にとって理解は容易ではない。

辺氏は「一般のコオロギ」を、全体的な基調となる色で青色類、黄色類、紫色類、紅色類、白色類、黒色類の六つに分類している。この色という尺度に基づく分類が、感覚的で曖昧である。たとえば、青色類の色は普通の色彩の青ではなく、頭や襟首、羽、腹部の褐色のなかに青みがさすというもので、その判断は簡単ではない。また、青みがかったものがはっきりしているものほど良いものとされる。紫色類は、当然紫を基調とするが、色の深いものはナスの皮のようであり、浅いものはマイカイ(ハマナスと訳されることが多い)のようであると喩えられる。その色がみずみずしく淡いものが良く、ひねた濃いものは良くないという。まずもって色を特定するのが難しいのに加え、色彩をさらに詳しく表現する際の「はっきりした」とか「濃い」、「艶がある」、「厚みがある」などの表現がさらに理解を困難にしている。その色ですら、時間とともに変化することがある(たいていは濃い色から薄い色に変わるといふ)というから、扱う時期によっても判断基準を変えなければならぬ。本当に分類できているのだろうかと疑いたくなる。

色で見分けがつきにくいときは、その鳴き声や動き具合などを加味して区別すれば良いという。しかし、それとて、青色類の声の調子は強く、低音で良く通り、広くて厚く、動きは従容として迫らぬものがあり、その歩みは落ち着いて力強いなどと、これまた非常に感覚的であり、余計にわからなくなるのである。

それぞれそのような色で分類された後に、各部位の色の組み合わせや、より微細な特徴によって、「品種」に細分化されている。「品種」とは、コオロギの身体的特徴の表出型を指しているのであり、各部位の特徴の組み合わせで判断される。青色類などは「真青」、「重青」、「鉄沙青」、「黄頭白青」、「葡萄青」など二十数

種の「品種」があり、その数は各級のうちもつとも多く、かつ優秀なコオロギを多く輩出してきたという。たとえば、「真青」は頭が丸くて青金色がかったなかに白い線が入っており、羽も青金色、足は丸くて長く淡く白く、棘が厚いと解説される。

さて一方、「一般でないコオロギ」は、その外貌の特徴に注目して、形が特徴的な異形類、相が特殊な異相類、色が特殊な異色類と三つに分類される。これらもまた、形とか色の感覚的基準によって分類されたものである。まず、異形類であるが、これはその体型が似ている虫や動物、物になぞらえて名付けられている。たとえば、「土蜂形」という品種はツチバチの仲間に、「胡蜂形」はスズメバチ、「蠅螂形」はカマキリ、「蜘蛛形」はクモ、「海獅形」はアシカ、「棗核形」はナツメの種に似ているのでこう呼ばれる。異形類は品種名の最後に「く形」とつくものが多い。

次いで異相類は、頭や足、羽、眼、触覚など局部的な部位の特徴に注目して名付けられており、その「品種」数は三十数種ともつとも多い。たとえば、「寿星頭」というと頭部に突起があり、これが黄玉(トパーズ)に似ているために名付けられた。また、「八脚」という品種があるが、これはその名の通り、足が八本あるという奇形で、一戦交えるに大変凶暴であるという評判をもつ。

最後に異色類であるが、これは特徴的な各部位の色彩や、その組み合わせによって名付けられている。「一般のコオロギ」と比較して色の構成、配色の点において「異色」とされているのである。たとえば、「天藍青」という品種は、頭は黒で白い線が入っており、藍色の襟首をもつ。朝みると青だったものが夜みると黄色、晴れの日にみると紫に近く雨の日には白くみえる、というように、その体色は絶えず変化し、定まらないという。これもまた珍品とされる。

異形類、異相類、異色類などの「一般でないコオロギ」の「品種」数は、「一般のコオロギ」と大差ないが、実際に市場に出回る数はそれほど多くなさそうである。異形類は比較的凶暴で良い闘いをするため好まれる。異色類は一部を除いて高い評価を得る「品種」はさほど多くない。異相類は「品種」数が多く、ほとんどが好戦的な良い品種とされている。「一般でないコオロギ」は、その希少性、異形性からいつて名うての「品種」として垂涎の的になっているものが多い。

以上のような分類法に従い、闘コオロギは百数十種にもほのぼの数に分けられているのである。確かに、「品種」を分類するにあたって、客観的で明確なカテゴリーは明示されている。だが、それをカテゴリーとする基準は、私の素人目にはかなり感覚的、曖昧に映る。コオロギは我々素人にはどれもほとんど同じに見えるのであり、誰にでも一〇〇種以上に分類できるといふ代物ではない。コオロギの「品種」分類は、顕微鏡的な細密な観察を長年続けてきた熱心な闘コオロギ愛好家たちの、経験に裏打ちされた技術なのである。

それぞれの「品種」の名前は、多くの闘コオロギ愛好家たちにコオロギの容貌や、固有の闘い方や癖など行動のパターンを思い起こさせるインデックスとなっている。さらに、このインデックスから、その「品種」の今まで闘ってきた戦歴が喚起される。何年前の何処そこで誰々がこの「品種」で闘い、勇猛果敢であったとか、五連勝したなどという物語が付与されることにより、コオロギ購入時における「品種」の力量判断の重要な尺度となるのである。もちろん、その戦歴はあくまで「品種」の戦歴なのであって、個体のもではないが、歴戦の勇士を多く輩出した「品種」の人気はやはり高いのである。

さて、コオロギの質を見極めるもう一つの重要なファクターとして、さらに外貌から判断する「相法」がある。これを「品種」の特性に加味して、最終的な優劣の判断が行われる。「相法」は、古くは「八格」といわれる頭、眼、牙、触角、首、羽、足、腹のそれぞれについて特徴を類型化し、優劣を判断するものであつ

た。たとえば、頭は、トンボに似た「蜻蛉頭」や、真珠に似た「珍珠頭」、ソロバンの珠に似た「算盤珠頭」など十数種に分けられる。このうち、「蜻蛉頭」などは、色の分類との組み合わせでいうと、どんなものでも良いとされるが、「珍珠頭」のコオロギは青色類、黄色類、紫色類、白色類でないと良いコオロギではないという。「算盤珠頭」に至っては、黄色類のコオロギでないと悪いコオロギであるとされる。また、さらに視点を変えて、頭は上部にある線(脳綫)という。コオロギの優劣を判断する際のもつとも重要な選択指標)の様で、「無綫形」、「牛角形」、「羊角形」など十数種に分類されている。

このように「八格」のそれぞれについて形ばかりでなく、色や模様といったものまで細かく分類し、それと全体の色や「品種」の特性を組み合わせることにより、優劣が判断されるのである。多くの変数の組み合わせによって優劣判断、解析の精度を高めようとしているのであって、最近ではそのチェックポイントが、「八格」||八カ所から増えて二〇カ所近くになっているというから、その難解さは筆舌に尽くしがたい。

以上のような長年にわたる顕微鏡的な観察と、特異的な執着心によって初めて体得できるであろう複雑な体系について、はたしてどの程度の闘コオロギ愛好家、コオロギ商がマスターし、応用しているのだろうか。私の「品種」に関する問いに対し、的確に答えられる闘コオロギ愛好家がいれば、良くわかつていないのに適当にごまかしながら飼育する闘コオロギ愛好家もいる。これは、コオロギ商についても同様である。辺氏のように、複雑な体系を把握し、細かく「品種」分類のできる人はそれほど多くはないと思われる。ただし、詳しくは知らずとも、ほとんどの人がコオロギに「品種」があり、それによって優劣の差、ひいては価格の差が決まっていることぐらいは知っているのである。また、このような知識や技術の多寡が、闘コオロギをやる愛好家自身の優劣の評価につながっていることは間違いない。

この体系について詳しく語ってくれた辺氏は、闘コオロギ愛好家で組織される上海蟋蟀研究会の代表者

を務め、闘コオロギ愛好家はかりでなくコオロギ商の間でも博識で通る名士である。辺氏は、このような知識を六〇年近くにわたる闘コオロギの経験と、古くより書き残されている、闘コオロギ指南書、手引書類を博捜することにより身につけた。さらに、同氏は自身なりの知識、技術の体系を新たに位置づけ直すために、闘コオロギ指南書を世に問うている(辺 一九九五、辺・楊 一九九五)。私に語られた体系は、すでにそれらの書のなかに文字化されており、不特定多数の人々が自由に獲得できる知識として流通している。また、辺氏は、上海蟋蟀研究会の会報や講習会を通じて、多くの知識と技術を闘コオロギ愛好家へと伝授している。

辺氏の行っている飽くことなきコオロギの分類、体系化は、単に研究熱心な辺氏の性格にのみ帰されるものではない。かつての中国社会において多くの人にみられたことであるし、現在も継承されていることであるといつて良い。それは、古くより闘コオロギ指南書が刊行されてきたこと、そしてその刊行が近年になっても衰えるどころかむしろ盛んになっていること、さらに、その新しい書物のなかにみられる知識が、依然として古書の情報、体系を下敷きとしており、それらを踏襲しながら、新しい情報を付加する形式をとっていることから明らかである。コオロギという一つの昆虫を微細に観察し、それを複雑な体系に位置づける試みは、実は南宋一三世紀の宰相賈似道が著した『促織経(促織はコオロギの古語)』に、萌芽がみられるのであり、それは現在でも連綿と継承、発展されているのであって、まだ終わっていない作業なのである。

四 コオロギたちの日常生活

コオロギに関する知識、技術は一つに経験によって得られるものである。またもう一つに文字を媒介にして得られるものもある。経験によって得られた知識、技術のある部分は熱心な人々によって、文字化されることにより定着しスタンダードとなり、流通していく。この文字による知識、技術が民俗文化に大きく影響を与える状況は、中国文化を考察する上で無視することはできないものである。コオロギ飼育文化に限ってみても、文字文化、出版文化の発達した中国において、好事家による手引書、指南書が発行され、これが一般の闘コオロギ愛好家の民俗知識、技術に大きな影響を与えている。

さらに、これに人々の口頭によって伝えられた知識、技術が加わることによって、その全体量は大きく膨らむ。たとえば、先に述べたような細かい「品種」の特徴を口頭で端的に解説するために、また、その解説を覚えやすくするために、内容をコンパクトにまとめ節回しを良くした「歌謡」が伝えられている。だいたい主要な品種には「歌謡」がついており、たとえば青色類の「重青」という「品種」は「重青顔色似真青、六足無斑此判明、若配白牙棟梁材、紅牙雖好非將軍(重青)は色が「真青」に似ているが、六足に斑がないので見分けることができる。もし、白い牙をもっていれば棟梁の才があり、赤い牙をもっていれば悪くはないが、將軍(強いコオロギの尊称)ではない」という、韻をふんだ調子の良い歌で、その特徴が解説されるのである。

また同様の知識として、「口訣」がある。これは「歌謡」と同じように、コオロギについての習性や特徴を

端的に言い表す決まり文句である。たとえば、「三反」という言葉がある。これは、コオロギが一般の動物の道理に反した三つの特徴をもつ、ということを的確に伝えるものである。第一に、普通の動物では闘いに負けた方が鳴くが、コオロギは闘いに勝った方が鳴く点。第二に、普通の動物は交接するときにオスの上になるが、コオロギはメスが上になる点。第三に、普通の動物は交接をすればオスの力が衰えるが、コオロギは交接をすればするほど力は増し、闘争心がわいてくる点である。闘コオロギに関する知識は、形式化された語りにより暗記され易くなっている。「三反」以外にも、「八忌(避けるべきコオロギの八つの特徴)」や「十不闘(闘わないコオロギの一〇の特徴)」、「五不選(選んではならないコオロギの五つの特徴)」などと枚挙にいとまがない。このような知識は、闘コオロギ愛好家の口から口へと伝えられてきたが、これもまた経験で得られた知識と同様に文字化されることによって、広く流通している。辺氏の書いた闘コオロギ指南書に限らず、多くの類書に同様の「歌謡」、「口訣」が収録されているのである。

以上のように、民俗的知識のもとに細かく観察され、その力量を見込まれたコオロギたちは、各闘コオロギ愛好家の手で繊細、丁寧に育てられその実力を伸ばされる。その際も、当然闘コオロギ愛好家は飼育に関する多くの知識、技術を駆使している。闘コオロギにおいて、コオロギ自身の先天的な資質はもちろんのことであるが、その資質を引き出すため、飼い主の十分な庇護が求められるのは当然のことである。

コオロギは、日常たいてい「蟋蟀盆」とか、「蟋蟀罐」という直径一二〜一三センチメートルの円筒の陶器で飼育される。一匹あたりに一個の「蟋蟀盆」があてがわれる。上海の狭い住居では置き場に困るので、ベッドなど下に何十もの「蟋蟀盆」を積み重ねて飼うこ



写真5 「蟋蟀罐」

上海の狭い住宅では、「蟋蟀罐」の置き場に苦慮する。

となる。「蟋蟀盆」は、古いものほど良いとされる。それは、新しい「蟋蟀盆」は焼成したばかりで、陶器から有害な成分が滲み出すと考えられているからである。それほどコオロギは敏感だと考えられている。そのため新しい「蟋蟀盆」を購入したときは、数年地中に埋めたり雨曝しにしたり、また、水中に浸したり煮沸したりした後で初めて使用するという。

「蟋蟀盆」はコオロギにとつての「住居」である。コオロギの健康を維持するため、いつもきれいに保たねばならない。二、三日に一度は餌の食べ残しや糞のこびりついた「蟋蟀盆」の底を、金たわしのようなものでこすり落とす。さらに、布で拭き上げるといふ念のいれようである。「蟋蟀盆」のなかには、「鈴房」を据え置く。たいてい陶製であるが、なかには紅木でできたものもある。「蟋蟀盆」がコオロギの「住居」だとすると、「鈴房」はコオロギの「寝室」である。「鈴房」の脇には飲み水をいれる「水碗」と、餌を載せる「飯板」という二センチメートル足らずの小さな「食器」を配置する。「飯板」は一分硬貨で代用されることも多い。「蟋蟀盆」のなかには、コオロギのミニチュア世界である。

これら「食器」は不潔にならないよう、こまめに取り替えるようにする。取り替えるときにはコオロギに手で触れぬようピンセットを用いる。コオロギは手で触れると弱りやすく、また、ちよつとしたことで手足がもげることがあるため、取り扱いには注意を要する。そのため、水の補給にはスポイドを、餌の補給に専用の柄の細長い匙を用いている。

餌には、闘コオロギ愛好家それぞれの経験と、創意が反映しているので、必ずしも一般化して語れないが、粥状にした米一、二粒というのがもつとも簡単なものである。花鳥魚虫市場で売られているときは、たいていその程度のものしか与えられていない。しかし、熱心な闘コオロギ愛好家は、購入後家へもって帰ると、餌に様々な工夫を凝らしている。たとえば、魚、エビの頭やカニの肉、豚肉の赤身、カエルの足

などを与える人もいる。また、魚骨やトウモロコシ、蛇の肉、ブタの肝臓などを細かく潰して配合し、与える人もいる。たいてい闘いの前後には、力のつくときとされるもの（動物性のもの）が与えられる。季節ごとに餌の種類、配合比率を変えたり、丁寧な人では病中病後というアクシデンタルな事態に対応して餌を調節する人もある。必ず火を通すとする人、逆に天然ものを生でしか与えない人など調理法も様々である。何をどれくらい、どういった割合にし、どのように調理して与えるかということは、闘コオロギ愛好家個々のこだわりによって決められるのであり、そのレシビの肝心な部分に関して基本的に秘密とする人も多い。

このような餌とともに、日常的に与えられる飲み水も単なる水ではない。人間に飲ませると同じく、水道水をそのまま与えることはなく、必ず一度沸騰させたものの湯冷ましを与える。こまめに交換することが肝心である。なかには、コオロギのためにミネラルウォーターを購入することもあつた。また、甘草や茯苓、高価な朝鮮人参などの漢方薬を煮出した湯を薄めて与える人もいる。その配合比率、濃度なども個々の闘コオロギ愛好家で工夫されている。花鳥魚虫市場では、コオロギやその飼育道具に混じって、そういうコオロギの健康用品も売られている。餌や飲み水はコオロギの日常の健康や、戦闘時の体調に大きく影響を与えらる考えられているため、季節やその時々々の状況を鑑みて注意深く細やかな対応がとられている。コオロギの「食」、「住」に関して、このように注意深く細かい技術で手間暇がかけられている。しかし、日常的な厚遇は、これだけにとどまらない。

大きな哺乳動物のペットならそう珍しいことでもないのであるが、コオロギのような小昆虫に対してはほとんど行われないう飼育技術がある。それは「入浴」である。これは基本的に、鉢の汚れを落とすために行われるが、まだ暑い時期には暑さを避ける



写真6 市場で売られる闘コオロギの道具類。道具類にまじって、甘草などの漢方薬や闘コオロギ指南書が売られている。

役目も果たすという。晩夏から初秋にかけては三〜五日に一回、気温の低い頃は約一週間に一回「入浴」させれば良い。

やり方は、大きな洗面器や鍋に水をいれ（これも雨水かきれいな河の水が良いという）、甘草を加えて良く混ぜ、ほんのりと黄色くなったら水をかき回して、そこにコオロギを落とすというものである。水の流れにしばらく任せておくと、油や汚れが浮き上がってくるから、それを取り除き、コオロギを捕る専用の網でコオロギを掬い上げる。網にいれたまま水につけることもある。「入浴」後は、トイレットペーパーの上に載せて十分に水を吸い取る。この「入浴」が闘コオロギ愛好家の間で、どの程度実践されているのかわからないが、辺氏など熱心な闘コオロギ愛好家は必ずやると語る。

「食」、「住」や「入浴」など、コオロギの日常生活における愛好家たちの介添えは、一貫してコオロギの健康、闘いに向けて良い体調を維持するためのものである。コオロギの体調は、毎日の世話のなかで十分に把握しているから、もし、体調がすぐれないと、「治療」を行う。「治療」するには、まずどのような症状か判断する必要がある。夜間鳴き止まないとか、動きが鈍くなったとか細かい行動に着目して、病因を診断し、具体的な治療法をあてはめていく。治療法は、漢方薬を与えるのが中心で、症状に合わせて薬を選ぶ。戦闘後の傷の治療も同様で、負傷した部位によって治療法や漢方薬が異なる。このような対応は、人間に対する対応と何ら変わりはない。もちろん、使用する薬や量など処方に違いはあるものの、基本的に中医(中国医学)と同じ論理体系で対応していると考えて差し支えなからう。

さて最後に、コオロギの体調を整え、気力を充実させる飼育技術をもう一つ紹介しよう。それは、メスコオロギとの交接である。先に「三反」ということで、コオロギが動物の道理に反した三つの特徴をもち、その一つに普通の動物は交接をすればオスの力が衰えるが、コオロギは交接をすればするほど力は増し、

闘争心がわいてくる点を紹介したが、この性質を信じて、闘コオロギ愛好家は計画的にコオロギに交接させる。おおよそ白露(二十四節気の一つ、九月の上旬)過ぎると、オスの「蟋蟀盆」のなかにメスを放し、一緒に住ませる。すると自然に交接を開始する。オスはメスと一緒に住まわすと、元々住んでいた山野とは違う環境下の「蟋蟀盆」なかでも、落ち着いて生活できるという。

メスは、産卵管を含んで三つの尾があるようにみえるため「三尾」と呼ばれるが、オス同様に牀の大きさ、形、模様、色などで「梅花三尾」、「老虎三尾」など数種類に分類され、オスの交接相手としての適不適が判断される。この際の判断において温順さ、交接への積極性などが問われている。コオロギは精力旺盛なので、一匹のオスに対し三〜五匹のメスを配するのが理想とされる。そのため、メスの飼育数はオスの三〜五倍ということになるのであるが、実際はそんなに多く飼う人はいない。また、オスと違って飼育にはそれほど神経質にはならず、大きな器に土をいれてまとめて飼う場合が多い。メスは花鳥魚虫市場で売っている。また人工的に増殖したり、オスコオロギを捕るときについて捕ってくるなど自分で工面する人もいる。人工繁殖をする人は、交接後メスを卵を生ませ、それを育成させる。そこから生まれたオスも闘コオロギに使われるが、育ちや餌が違ふということで、やはり天然ものには敵わないと考えられている。そのため、全面的に人工繁殖だけでコオロギを確保している人はほとんどいない。

この人為的な交接技術は給餌と同じように、闘コオロギ愛好家それぞれの経験と、創意によって工夫されているので一般化できないが、丁寧な人になると一日に三回、朝、昼、晩と決まった時間にメスをいれ、交接後すぐにメスを取り上げ隔離し、過剰な交接を防ぐという人もいる。またある人は、闘わせる二〜三日前からメスを「蟋蟀盆」のなか

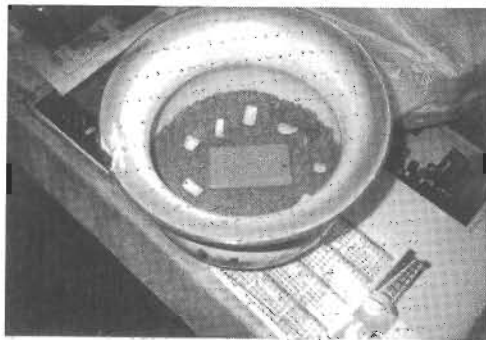


写真7 コオロギの人工繁殖
小さなコオロギの子供が小さな器のなかで数十匹飼われている。

にオスと同居させ、対戦の半日前に一度取り出し、一時間前に再び一緒にして交尾させるという工夫をする人もいるという。

このように人為的交接技術は、オスの戦意高揚、また体力増進に主眼が置かれているところに特徴がある。通常、家畜などはその生殖が人の管理下にあるが、その際の性行動の管理は、再生産や群れ管理技術に寄与する技術である。ところが、この闘コオロギにおける性行動の管理は、「闘う」というこの虫の存在理由となっている性質の遂行のために寄与するのである。人工繁殖に利用されることもあるため、再生産に寄与する側面もないことはないが、メスの選択は明らかに交接という性行動自体の能力に基づいているのである。認識的に、生殖以外の目的で性行動がコントロールされる。これは、動物飼育の多くの技術のなかでも、特異的な認識を与えられた技術だといえよう。

五 闘うコオロギたち

コオロギは、千数百年もの長きにわたって闘ってきた。それはあるときは、賭けの対象として、またあるときは子供の遊戯として、賞玩されてきた。現在では当然賭博は禁止されているため、大ぴらに行われることはない。ただ毎年秋になると決まって紙面を賑わせるコオロギ賭場の摘発の記事から、エキサイティングなコオロギの取っ組み合いに、人生を賭する人々の存在が確認できる。しかし、最近では闘コオロギ愛好家たちによって組織された同好会や研究会などの、公的な組織による健全な大会が開催されており、それは全国大会が開かれるほどまでになっている。このような公式戦の背後では、友人などを相手にした、

こじんまりとした対戦が無数に行われている。

コオロギは、買ってきてすぐに闘いに使えるというものではない。その実力を発揮するためには、すでに述べてきたような日常生活の節制が肝要である。そして、徐々に普通のコオロギから闘うコオロギへと仕立てあげられていくのである。秋分前にはまだ躰ができていないので、十分に餌をやり静かに育てる。その頃にあわてて闘わせると、怪我のもとである。秋分過ぎて躰が十分にできあがってから、闘い始める。それでも、すぐに本格的な試合には入らない。たいてい各地の同好会では、この頃に簡単なテストマッチを行う。これで強さを見極め、さらに体調を整える。「品種」によって、早い季節に強い早熟のものや、逆に晩生のものがあるので、闘い始めさせる時期を飼い主は的確に見極めなければならない。闘いの直前には、その戦意を高揚し、気力を十分にするため様々な工夫がされる。メスとの人為的な交接もその一つといえる。

闘い前には、餌など与えるものにとくに気をつける。普段の食事さえも秘伝として隠す人がいるくらいであるから、闘い前の食事は秘伝中の秘伝ということになるのか。色々な虫のさなぎを潰して与える人もあれば、普通、鳥の餌として用いられる「面包虫」メシトウと俗称される幼虫を食べさせる人もある。それぞれの闘コオロギ愛好家が、本当に何を与えているのかは、実のところ闘コオロギ愛好家の仲間内でもはっきりとしない。興奮させるために漢方薬を与えるのはまだ許せるとしても、博打でやるものの中にはヘロインなど麻薬の類?をなめさせ、乱酔した状態で闘わせるものまでがあるという。こんな噂がまことしやかに語られるくらい、闘いの前にはみんなが色々なことをやってくるのである。極端に麻薬とまでいかなくとも、試合の直前にメンソールの効いた清涼油を、コオロギの額に塗っておき、相手が組むのを厭がり逃げないように仕向けるという、姑息な手段をとるものもいる。こういう薬を用いたドーピングのコオロギを「薬

水虫」と呼び、このような虫が試合へ参加するのを防ぐため、半日前には「蟋蟀盆」にいれ、試合まで封印するというルールをとることもある。

試合前には、持ち主たちも相当神経質になる。相手が、「薬水虫」でないか、何か不正はないか、自分のコオロギの相手が釣り合っているかなど、持ち主は大いに気になるところである。上海蟋蟀研究会では、対戦の前には、必ず計量する。取り組みは、ボクシングのように、同じ大きさのものを同士の基本的な組み合わせる体重別となっている。そのために計量するのであるが、この計量が、すでに述べたコオロギの分類や飼育技術に、負けじ劣らず素人には推し量ることのできない、繊細で微妙な世界を形成している。

上海では、コオロギの体重を量るのに、「簧」という天秤を使う。コオロギは、一グラムにも満たない小型の虫である。その体重を量るといっても容易ではなく、非常に精密な秤が要求される。普段の生活で一グラム以下のものを量ることなどあろうはずもないし、そんな必要にも迫られないのであるから、コオロギ専用の計量器を作らねばならない。昔は紅木で作られる一種の工芸品であったが、現在はプラスチック製のものも登場している。とはいえ、今でも純粹にコオロギだけを量る道具として作られ続けている。

コオロギは跳ね回るので、容易に天秤に載ってくれない。そのため、「吊籠」という容器に閉じこめて計量する。「簧」はあらかじめ「吊籠」の重さを見越して設計されている。上海では、「尊ツン（あるいはツツヤともいう）」、その十分の一の「点テイエン」という単位をもって、コオロギの体重を表現する。この単位も計量道具と同じく、コオロギを量るためだけに使われる専用の単位である。なんと闘コオロギは、日常生活とは無縁の、ミクロの世界しか通用しない独自の単位までも保有しているのである。

この単位がこれまで非常に細かい。上海蟋蟀研究会では、二尊から五尊まで(約〇・五一グラム)〇・七四グラム)の体重別とする。それより小さいもの、大きいものは参加資格がない。二尊の一つ上のランクは

二尊一点であるが、これは「二正一」と表現される。その上の二尊二点は「二正二」である。このように分けると、二尊から五尊まで三一階級にも分けられることになる。同体重を基本に取り組みが決められるが、その差二点まで対戦が認められる。たとえば、「三正三」のコオロギは「三正一」〜「三正五」の五階級との対戦が可能なのである。〇・数グラムの体重しかないコオロギの個体差は、当然一グラムもないから、一グラムに満たない重さを三一に分けて、意味ある階級として利用しているのである。この微細なところまで表現しようとする、闘コオロギ愛好家たちの執着は想像に絶するものがある。

こんな細かい体重が、はたして本当に意味をもっていかどうかは、わからない。しかし、彼らが一点でも小さいものと闘わせようとして(当然大きいものが強いと考えられている)努力を続ける姿を見ると、このグラム小数点以下の闘いは意味あるものとして意識されていることは間違いない。それは、闘コオロギ愛好家はその細かい体重差を重要視するあまりに、闘い前にコオロギに減量までもさせることから理解できる。この方法も多様で、「蟋蟀盆」にコオロギをいれたままドライヤーで暖めて体内の水分を減らすやり方、腹を下すマコモを食べさせるやり方、もっと極端なものには「蟋蟀盆」のなかに乾燥剤を直接いれるやり方などもあるという。単位が細かいから、乾燥剤をいれて鉢の余計な水分をとると、簡単に数点下がってしまうのである。

こんな複雑な前段階を経ているよよい闘いである。上海蟋蟀研究会の大会では、今では弁当箱の形をした「闘柵」という専用の枠を用いるが、日常のちよつとした闘いには「蟋蟀盆」がそのまま使われることも多い。また、古くは「蟋蟀盆」より少し大きめの闘い専用の盆「闘盆」も使っていたが、現在はほとんど見受けられなくなった。

勝負は、どちらかが戦意を喪失して逃げ回り、その相手が勝ちどきを上げた時点で決着する。研究会の

大会では正式に審判がついて判定制をとっている。そこでは、五戦して三勝したものを勝者とするやり方と、三戦で二勝したものを勝者とするやり方があるが、最近三戦マッチが多い。闘う前の二匹のコオロギは、「草」で触覚や足を刺激され、興奮を高められる。しかし、すぐにぶつかり合い、咬合するものもあれば、互いに牽制して対峙したままのものもある。動きの鈍いときはさらに「草」でくすぐり、積極的に闘うように誘導する。このくすぐり方にも様々なやり方があり、状況に応じて飼い主が駆使しなければならぬ。このくすぐり方の練習法を書いた指南書もあるぐらいで、こうなると飼い主もコオロギと一緒に闘っているといっても過言ではない。

六 文化のなかに埋め込まれた自然

以上のように、中国では闘コオロギをめぐって複雑な文化が彩なされている。この多くの都市住民を熱中させる闘コオロギは、単なる戯れごとではなく、また、特別凝り性の好事家たちによって担われる特殊な文化でもない。それは、中国社会のもっと奥深いところにある、尋常ならざる自然観を投影する文化であると考えられる。

この文化はまず第一に、微にいり細をうがつような極微さにその特徴がある。百数十種類にもよる「品種」や「相法」は、わずか数センチメートルのコオロギの各部位を隅々まで舐めまわすように凝視し、その様相を規範と照合することによって得られる。それは、闘コオロギ文化にあらわれる顕微鏡的な世界の代表であると考えられる。

この志向性は、植物を小空間のなかに封じ込める、盆栽の文化に一脈通じるものがある。フランスの東洋学者ロルフ・スタンは、盆栽を評するに「やむをえず小さいのではない。それどころか逆に、小さいこと、そのものにいっそうの価値が与えられるのである。実際、自然の再現は、それが現実の尺度から遠ざかれば遠ざかるほど、神話化され伝説化される。人の手でとりあつかわれ細工されるようになると、最後に残った作画的な、見せかけの現実すらとり除かれる。つまり唯一本物の実在である」(スタン 一九八五：七八―七九)と述べている。この考え方は、闘コオロギ文化にもあてはまるのである。コオロギの分類や階級、道具はやむをえず細小なのではない。それは細小、緻密であることに価値があり、間違いなくそれは闘コオロギ世界の拡大につながっている。現実の尺度から離れた極小の世界はまさに現実離れしているが、そこに登場する動物は実在としての動物である。山野を駆けめぐる動物といささかの違いはない。そこに、自然が、ある。

さらに、この文化は複雑な体系化を志向する点において特徴的である。感性的ではあるが、紛れもなく確固とした基準に基づく分類行為により、すべてのコオロギは、何らかの形で「品種」や「相法」という体系のなかに位置づけられる。また、少しの差しか存在しない体重をあえて指標とし、独自の体系化の尺度である秤の単位を使うことによって、階級という体系のなかのどこかに必ず位置づけられる。それは機能ごとに専門化された道具からも同様のことがいえよう。コオロギという小昆虫一種類に数十種類の道具が付随し、それは、それぞれ飼養の各段階で活用される局面が決まっており、飼育の体系のうちに的確に位置

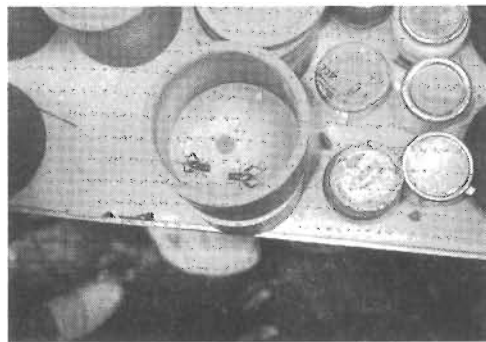


写真8 闘うコオロギたち
牙をむき出しにして、取っ組み合う。

づけられているのである。

一見矮小にみえる鬮コオロギの世界は、それ自体自然であり、「蟋蟀盆」のなかをのぞき込む人々は、そこにミクロ・コスモスとして体系化された自然を感じとっているのである。そこでコオロギは、あるがままの生き物としてではなく、人の手によって作り上げ、完成されるべき生き物として扱われている。そのような積極的人為は、望ましいものとして理解され、管理は徹底されているのである。そして、そこに創出された自然は、盆栽と同じく「あるべき自然」がデザインされたものであって、「あるがままの自然」とか、文化に對置して実存できるような自然とは大きく異なるのである。

最後に、この文化は、工芸文化と連続性がある点において特徴的である。専門分化した道具類は、機能ばかりではなく、美やその歴史性が重要視されている。「蟋蟀盆」、「鈴房」、「水碗」、「飯板」などは陶器、磁器であり、骨董価値も高く、古いものは高値で取引されている。「簧」や、「草」をいれるケースには紅木を使用し、臨時的にコオロギをいれる「葫蘆(瓢箪)」には、飾り部分に象牙を使い、美麗な彫刻を施すなど、道具は単なる鬮コオロギの器具の域を越えて美術品となっている。コオロギは飼わなくとも、コオロギの道具を収集するマニアがいるほどで、鬮コオロギはコオロギだけではなく、その背後で支える道具をめぐる工芸文化も等しく楽しまれているのである。そこにおいて人工の道具と、天然の生き物であるコオロギに大差はない。

このようにみると、鬮コオロギの文化は、山水画に代表される絵画や工芸など、人工的な虚構の芸術に実在としての自然を取り込む「芸術の自然化」と連続している。中国空間思想の時空を越えて風水文化を解き明かした中野美代子氏は、山水画に描かれる風景を、「ありうべき風景」ではあるが力学的には「ありえぬ風景」(中野 一九九二：九六)と評した。まさに卓見であるが、この言葉を借りるなら、中国のコオロギは

「ありうべき動物」ではあるが、生物学的には「ありえぬ動物」とでもなるうか。その自然性は、文化のなかでプランニングされているのである。これを「自然の工芸化」と、とらえて良いであろう。これは、実在としての自然に、人工的な芸術を持ち込むことによって、非現実を産み出す行為である。しかし、その非現実の自然の方が、「ありうべき自然」として、むしろ自然だと受け止められ、心地よさや安らぎを人々に与えているのである。

このような自然へのアクセスは、ヨーロッパ的な自然観からみれば、自然の支配—人間中心主義—のあらわれと、ネガティブに目に映ろう。しかし、中国文化において自然は、人間の可知的宇宙に位置づけられるのであって、文化と大きな隔たりをもつような自然の枠組みは全く必然性がない。その意味において、中国では「文化のなかに自然が埋め込まれている」(松井 一九九七：九)といえるであろう。

文 献

辺文華

一九九五 『蟋蟀経』 大連出版社。

辺文華・楊平主編

一九九五 『蟋蟀図譜』 上海科学技术出版社。

フリードマン、モーリス

一九九五 『中国の宗族と社会』 田村克己・瀬川昌久訳 弘文堂。

松井 健

一九九七 「はじめに『自然の文化人類学』」 東京大学出版会。

中野美代子

一九九一 『龍の住むランドスケープ』 福武書店。

周達生

一九九〇 『民族動物学ノート』 福武書店。

一九九五 『民族動物学』 東京大学出版会。

スタン、ロルフ

一九八五 『盆栽の宇宙誌』 福井文雅・明神洋訳 せりか書房。

編者紹介

松井 健 (まつい・たけし) 1949年大阪市生まれ。東京大学東洋文化研究所・教授。文化記述の方法論(エスノグラフィックス)、人類学の課題としての自然と文化、琉球列島と西南アジアの民族誌。『文化学脱構築』(1998年、榕樹書林)、『自然の文化人類学』(1997年、東京大学出版会)、「周辺性と民族的自立」(『周辺民族の現在』1998年、世界思想社)など。

自然観の人類学

(1000部)

2000年8月25日 印刷
2000年9月9日 発行

編者 松井 健
発行者 武石和実
発行所 榕樹書林

〒901-2211 沖縄県宜野湾市宜野湾3-2-2
TEL 098-893-4076 FAX 098-893-6708
郵便振替 00170-1-362904
E-mail: gajumaru@dh.mbn.or.jp

印刷所・株エーヴィスシステムズ 製本・榎青木製本
© MATSUI Takeshi 2000 Printed in Japan
表紙装丁・杉本直子 ISBN 4-947667-65-6 C3039

執筆者紹介 (目次構成順)

西谷 大 (にしに・まさる) 1959年兵庫生まれ。国立歴史民俗博物館・助手。中国考古学。「貨幣の誕生—宝貝と厭勝銭—」(『お金の不思議—貨幣の歴史学—』1998年、山川出版社)、「ブタとコマ」(『歴博フォーラム 倭人をとりまく世界』2000年、山川出版社)など。

菅 豊 (すが・ゆたか) 1963年長崎生まれ。東京大学東洋文化研究所・助教授。東アジアにおける民俗動物学、環境民俗学。「深い遊び」(『現代民俗学の視点1 民俗の技術』1998年、朝倉書店)、「關コオロギからみた中国漢人都市民の自然観」(『北海道大学文学部紀要』47-4、1999年)など。

篠原 徹 (しのはら・とおる) 1945年中国生まれ。国立歴史民俗博物館・教授。民俗学・民族植物学。「自然と民俗」(1990年、日本エディタースクール)、「海と山の民俗自然誌」(1995年、吉川弘文館)など。

窪田幸子 (くぼた・さちこ) 1959年東京生まれ。広島大学総合科学部・助教授。オーストラリア先住民社会の変化と女性、狩猟採集社会の比較。「社会変容と女性」(1999年、ナカニシヤ出版、共編著)、「親族の基本構造を生きる」(『岩波講座文化人類学4 個からする社会展望』1997年、岩波書店)、「女が神話を語る日」(『採集狩猟民の現在』1996年、言叢社)など。

永ノ尾 信悟 (えいのお・しんご) 1948年神戸生まれ。東京大学東洋文化研究所・教授。ヒンドゥー儀礼の形成と展開。*Die Cāturmāsya* (1988、東京外大A・A研)、「The Formation of the Pūjā Ceremony」1996、*Str II* 20: 73-87、「The Autumn Goddess Festival」1999、*SES* 50: 33-70など。

菅原和孝 (すがわら・かずよし) 1949年東京生まれ。京都大学総合人間学部・教授。コミュニケーションの人類学、アフリカ狩猟採集民の民族誌的研究。「身体の人類学」(1993年、河出書房新社)、「語る身体民族誌」(1998年、京都大学学術出版会)、「会話の人類学」(1998年、京都大学学術出版会)、「もし、みんながブッシュマンだったら」(1999年、福音館書店)など。

高倉浩樹 (たかくら・ひろき) 1968年東京生まれ。東京都立大学人文学部・助手。社会主義/ポスト社会主義をめぐる人類学的研究、シベリア・中央アジア・モンゴルの民族誌。「サハ・ナショナルリズム再考」(『社会人類学年報』24、1998年、弘文堂)、「脱社会主義下のトナカイ飼育業の再編」(『民族学研究』63-1、1998年)など。

子島 進 (ねじま・すすむ) 1964年鹿児島生まれ。国立民族学博物館・外来研究員。パキスタンの民族誌、イスラームの人類学的研究。「カラーコラムにおけるイスラーム派の変容」(1999年、博士論文)、「イスラームと農村開発(パキスタン)」(『NGOが変える南アジア』1998年、コモンズ)、「F. パルト『スワート最後の支配者』(翻訳、1998年、勁草書房)など。

武田 淳 (たけだ・じゅん) 1943年山形生まれ。佐賀大学農学部・教授。サブサハラにおける諸民族の生態人類学的研究、南西諸島・オセアニア・韓国におけるサンゴ礁・干潟生態系の海洋民族生物学的研究。*Human Activity System: Its Spatiotemporal Structure* (1977、Univ. of Tokyo Press)、「地域文化の均質化」(1994年、平凡社)など。

河合香吏 (かわい・かおり) 1961年愛知生まれ。静岡大学人文学部・助教授。東アフリカ牧畜諸社会における身体と自然をめぐる認識と行為に関する人類学的研究。「野の医療」(東京大学出版会、1998年)、「Women's Age Categories in Male-dominated Society: The Case of the Chamus of Kenya」(E. Kurimoto et al. ed. *Conflicts, Age and Power in North East Africa* 1998、James Currey)など。

赤嶺政信 (あかみね・まさのぶ) 1954年沖縄生まれ。琉球大学法文学部・教授。奄美・沖縄地域の民俗学的研究。「シマの見る響—おきなわ民俗学散歩—」(1998年、ボーダーインク)、「歴史のなかの沖縄—イザイホー再考—」(『現代民俗学の視点3 民俗の思想』1998年、朝倉書店)など。